増鏡

四

内閣文庫
和書
類
一二七九七四 號
一 冊
三八 函
四 架

内閣文庫
番號 和 27971
冊數 10 (4)
函號 138 36

国立公文書館
National Archives of Japan

第六　おなじ井戸の事

明治十三年購求

まつすぐ成なるあけ年さらりかしこまれて。康元元年
あるとのるふ年りの。大さわらしかれ年二乃御むすめ
東一条院　女御より御の中を給はり女院しかるべきかなまいを
ぐ給へ御程なるまいかしあるあまり給へ
十二月十七日豊乃あるれこのあまりたぐらるる
まいるやうなるよりとぐうらをへくいまめしうれ
ぬるそれ日御きうそこをやしらます
タくれふまりそ久しきるとは坂ます
うらぬ女の子乃きめ代
光げ
明白かりせ給ひしうり紀のゆ
くまの
ゆ紀御をなれ八宇て

かつらのこうたいしもとびてはくまれつりぶれありぶ。
て人くぶはうりのほうわのはまぶ。女御の君うしこれを
りうしをぶ上重をとりうりのうしもとびあうの久乃かしさぬ。
うれくきる牛のいりえきれうりうざりのうの久のうきぬ
きりふぶぶ車ずあみかふ人つくのるべ。この車た
よ一條殿大臣の右二条殿きんとうの大納言のむすめ二のたあぜちの君いまの
右ゝ中納言のむすめ三のたよ民部卿殿右別当どの
うれはきくくぶくくゝうれもうぢりは童作仕
はくしくはさうしはもとぶどのふのまでぶちよ
きをえりとふへらまてはぶりうう見あるかゝ
御ぶてうとれ殿ゝ右大臣殿内大臣ほんまいり給ふ

かぶりるくよそりあるり。院乃はるに人をてて
つせ給へきばふくくいつれまゝはりはんかるり。
侍賢門院乃白河院のはるとそぶはまりはゝも
ゝあゝまやとぶんあてよりはあがえ給ゝ。清門
の御とつはくゝれ姫君の院宮居えとてそれはるあ
殿御ぢはつうむよまいるぶうれはりはよ御ども女御き
ゝとゝぶるあぶうれ事ゝはあがゝれと多かは
えゝこうれ給もあと。人くそはゝゝ給ふ御たか
一番殿はさらやうあせち殿はのとう中納言もゝき
そりぶよゝる十宮よなりはゝるよ女御世えよそれりを
歌はは同きひいあるる御祖と中ゝくああぶゝりきかさ

よれりひのすけ殿ひめぎみ
はるかぬいとしばき
はるかぬ家れ所せ
しとかたてまつる世話ぬ
ものようらはいうつぶ乃
しにめぐさ。きこのるすあきじ准后うてまつり
給ふ大きはくじ三日ぐ
あよきんしのるぬ三日又
顕中将通世おうてこし度か
きこゆるの太政大臣初
せうとぞかし。権令院と
めでたくうあ世話ひよ

ど絶えなぬ

明日ひけ童ふよりまぬ
そしあうる世乃ぬ
沖ぬ大きはくきあえ給ふ
初日新あくれうむる雲ぬうう
行すぬと思さ契とぬ
女院ぬうそくうあうう
めて内乃うへ女御ぬ
関白殿右大臣ぬ内大臣
きの殿殿通成右大将
まいり給ふぬらいのぬ

はるかぬ所あのし
給ふ。准后いうつく
ものうち八ゆ方か
ぬいとけいうあぬき
ぬ准后うてまつり
給ふぬらひ
ぬ三日又
ぬうそこまいるぬつむ
ぬ分ぬぐうあと
ぬ所ぬ
ぬ
ぬ

大きたるしらぬひとのたちぬ
いろいろのはなもてはやされ
だいの句むすびさせうはい
きやうきやうしばしばかどの
めあるかぎりしてあるべし
后りあらはるとそ人のかむ
きらつぐたちぬしむかへらる
されはさうへなるものはぬ
きんりとて大将ゆをたなり
うしのまをなあいしあまた
我はるる大臣大后あてぬ

最勝講あるべしかくらまいりはいとかひ山
のうでしてはめづらかなる程すそはやし。后四母の法
おやはかりはかりはまくまてふうはうるものは
きりぬとしんくはりむしうは後の朝院はたひ
きりつけのまるさはせのぬるさ人すてなくり
やうしあるか

あるこれはけうなるぬみうさ山
うしかもえうるまはすそこそ后
うるしたし
おもいやまとうさはかはれあらのむ
されるへけりみつるはをは

まゐれば御ものがたりなどあるいはかくやむごとなきことと
おぼしはばかりてよろこばせたまひける
はるかなるいはまれまれかはるひとをも
きけばなほいかばかりかはるべきなりけり
正和元年九月廿日の御ぶみ
世をのがれ給へる御ものがたりの嘉明門院御なやみ
はなはだしくつきどころなくおぼしまどはせ給
八十七にてうせ給ひぬるなどいとかなしく
ほどなくまたかの御ぶみとあれば
うしろさきまつ世をのがれ給へるなほいとかなしく
事ぶりとかくのごとくなほ
きはなるものなりけり。あくるはかりの八月七日二乃宮
房子の内侍ひめぎみ十七にて
内裏へまゐりたまひぬ
正嘉三年三月廿日なりしや
あかりとなりもたりあるじとみなまで世乃
ものもれこそ天の下のはてにたまはりて
大臣内大臣左大将
さくおぼさるるにはかに
きまるいのりみかさしけるまでかなしかなか
おくそえりとのくらとはくらくさかしそどもすす
くらを筆ぶををとびがしらもありけること

めつらしくおどろかれぬべきにかんぢろの金とのぞ二重三重まきたるをりはしはかりはかりやはとはあやめき紅梅のなかばぬぬぱくしたれうのまろむしとそおぬぬせんまてうえくさはくのかうしうへのさあつあり衣おりひくのうあねといるせりぱいうれかさろさ姫のゆきもかはさぐひをありかくしろみえ給りうれかうこうかうしへもあるさりうまめとおるりうれいろを給ゝさりまるそゆきかるおまりかうぬはてゝてるめぐれ中将とうやぬむまらこれけりぬさんくきりまるそれ一をめつゝうめていやりこを給ゝさりまるかとうやぬのはゝはぬかゝちふ

こゝはひしゝぐ彩りとそくめてあゝかんえ給ふ浅ぢ御門内大臣宅邸のはよあはるぎれ大納言ぞあるのぞこ給ひとぞはもさやまあべくおりをれくまべ除目の頃ゝのうちれものどもらづひしてはるとつりるくゝ思ひあるゝ引きぐぐぞはるぞ少しつきんれれをとぶにておしせやらんぞり給へりはゝうこにゝうどかゝらおろうてあの高野は籠り井給ゝうるぞゝ泉ゝくあゝゝかゝとおがされうまだ久れ此華乃法ゆでるこの礼論とうづのさを給ひくゝ給ふいめんあるべくおりせゝきはゝりまるかれ。時のまでおりゝ事ものぶ者れまおれいりとと紀

たちへ。あらはなく志るして。ひときはけぶりの赤
とれごとごとりとぞ。ちらちらかちらちらわとかくく。
人もあくまでかきつらねたむ後のこむざう色ぞり
げのかたちひとうそのようそうすまたいまさ
よんしーとかりいとかいんんとれとそのこゆいを
ぶ。くれこそかくくよ佛事志げちゆく事ぞ
なくてのさ〜かもあがーむとがうるもあく。ぶん
ぐうさ山ありさゆるまたば門くまつまれくくまて
も思よこーとれき世ありぶ。四の院こそをはひ法華
合ぶ〜拾ぶ。ぶ〜で後まはいと久くおりまん
ありのこあり。志れてろ紡事あるうる月佛門を

ぶまりよあ〜せ拾るり。二条氏園白さまあけまるり
ふまま記き内乃女ゆうあでりて池乃法毎りおをて
地の者とも次おく接ざゆくく乃風流まりこ引地
なとあちうさ事とりくたけけうわき。ぶちぶの嶺山
ゆうりと。大井ぶのれきうあきーよあるまくゆ〜
き陰とそはく〜せ拾へ内ぶ。ぶ〜れ山乃まず忍戸瀧
熊乃滝もまれぐ〜ぶ遠乃うちれ人てわざとつて
ゆうぬせんざいをとのぶ〜あるけをくらへる所
ぶ〜のこ記御所といふを事をまひおく〜
志んでんのあ〜びよ。ぬみよあうちくわよ藥草
院ぶ〜に如來壽量院あ〜ぶ。橋大后入

ひらけてゝれさすゆゝ。塩林寺とゝ申し。いまゝ
も忘れて石ど忘だらりよ。ありゝまばそのあとゝ
浄金剛院とゝ申ゝ堂とゝてさもおへるゝ。道覚上人
と長老よあされく。浄土宗とおらゝ。天王寺の金堂
うりさもたまひて。多宝院とゝ。やたくられる。門も
のぞこそたびき。後ゝ。大多勝院とゝ。ゆゝ。
ひでんのりぐ。仏像とゝ忘さてまつゝ。殺さまゝ。
やうの引ゝ。まつゝ。みちいらうわ。後そ。橋
ど。成ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ろ。記。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
月さ。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

そもそもこの書は井を初めがかておまりおそそ
きほどあまりてあまりをとめかくやとおぼして。
大きおとゝ験おとゝいとまえ殺さびめをこのご
ゆりくためゝ初るの路つるとぞとりはおいたゝへる
大臣かんちめなどこれは神どもうちひまらりぬ女
院の法ゝ法はうちまして をきぼこころるくあぼき
るんりざれのよゆいらばうり功徳の法身よてうく
おぼをさ海よめでゝ記法きうへと人給ゝむとぞひ
聞きこゆるも悔しれまでうはゆゝ。帝遊
ゝてゝ月ち文墓めき院院のおせい
多くゝり神とはゝねくされようま

花をまりの世界のよはうをも
かりとゝむてこさいるくめくはくきこ始るり。
はるゝ月おゝ京さへそはけあれて始るまや
多くにさうくよりへきるこれ
りの君くれ女世乃ろきし
世をまでおはうゝしかどぞきのろのこはよてはぐ
めりいうゝうゝ初ゝ記くゆゝ珠給ひめるぞゝろあ
ゝさ無量光院乃花のりゝめておゝぐゆゝのろあ
あゝいづるもいんしゝ
あれ春そんの乃いゆるそゝけめる
六年あまりの花はんゝかを

そもそもこの八月廿八日春宮十一あそく御元服
し給ふ御のこれ恒仁とぞきこえ世中よやうくるの
めきやすめゆゑの事わまてこの御門さあるすのかそうな
がられぐ御のまへしづうの御あるを御物ぐるとれつい
でよ御物語の御そこいの数をとうぞへ給きこえれば五千
五十四日ありけりとぞけあるとなりて御んなりし
ゑやといふ色はめうこねそく七千一一
あまりはりすをれいはすまれ
あくて十一月廿六日おりゐ給ふ御年廿
さきへあそれよあうちそこ記くおりうのうくん
そんじ御物のあるおもしろあるまし記しい

記をんあるる事さへいまはいちてらげそくおりの
うへもおりしまりけ給へきど。鈴重のいでさせ給
よりどこの御物さよ御身とはあきぶりつるなく
記十三年御物ごろ引ろう御なくないとあくれな
出びがとさ御宮記をぞのとかんそまつれ
高弁御物
いまはとくおりゐ御をとはくあまに
おく海せうちそかゐくくまる

第七　くろうれしさとろく

寶治二年十月廿日ごろみぢはらんじかてく
うぢよりはるばる　はるのややのはるかんやうちめ殿上人お
もひくいろくのかり衣きくもみぢはてきうすれ
ぬいものをりぬあやめきかのくよりせのいとあ
るりせ一日の紅ばけはいぐさせはよぼろほり
あうしうすいろのうきとりものの花さしぬさ
ろ紅さしはは車にそそまつぶまげ殿上人下臈
しりあ約とぽはるそめうぢぬせんまくのかりきあ
右馬頭房名ぷりくをぎくれくをりぬ紅紅なる
ゆさあ紅くぎぷくぎ菊はうわ衣皇后宮ぶんのもけ

みちよ右中弁河つぐすあくのかさをり物ぷ
さ紅のさあぬぷあのひやうろのもけ邦經あいろはうわ
衣ぷをんのもけ親はぐ二あ弁のりりさぬぷりと
しひぐぷ伴氏さひやうろのもけ新はふむすび
りぶあふきくををさぬしてぷくさ紅をそあの
はしあさぷ菊とぬいしりぷかんくちめるりり川の大納
言ぐぐぷあくぷ皇后宮大夫ぷをちちあくぷ花山の
院の大納言まさ檢大納言ぷと紅面のおりぬはれりぎ
ぬぐき野はさあぬぷはつのは大納云あさぷろんのろん
はうすあくぷりんりこ船かきのをりぬはれりわ
きぬぷ月ぷ之副る紅しぷ雜ぷよ野勅とぷせたり

皇后宮大夫権大夫実房朝臣もとゝ人ざのあせんきうれかる
きあぐうきをり物の庄しめさ給のきぬぬちゝろどの
宰相の中将いまさかりけをり西ろりきぬ波多居御
御厨舎人まのぐいふせんとゝくをとくをとゝ院宮
出車ゝろよ権大納言むこんたうきぬ給の
きあぐゝろさ給へすてえもいろぬさゝてゝ
まを給ふけびゝ物面すぐまでおりひくよいで
めつゝきさゝめときのこゝ波きゝきゝんゞつ
まて給ふゝ。清府のかんさちめゝゝわきぬの波多
ゝかりやおぐひきをゝせゝろぐへあまゝ二枚一の車
ゝまゝくれもみゝときくゝうゝ給田殿の

かゝれ多とめいぐ寄ひとめくゝれをゝ二の車
きくといざされゝをゝなべくれ多ゝんやゝ物
院の西めれと大納言二位殿いとまをりけめて。諸
大夫さゝひきをけるめゝぐてまりきゝ
さいゝやゝ二位殿ときこゆるをゝれまゝの法母
殿やゝ急の用物多といひゝぽのごろきゝ二位ゝ法
ゝいゝ一きいめでゝく極くゝけまて物面出下
殿ゝ三人。法大夫二人おゝ波ぶゝふむさはくろひ
をゝ法ゝきゝ物。遠久よ懐香殿院宮法乃法華殿波
時ゝ院それゝろ二条の君ゝてまりをゝり例を
まゝぐ波ゝやゝそやゝけゝ大納言殿とけゝ

義大納言さまあやのうしとめそれもをちよりさ
まていくとのうゐてまいりかうぢ川ぬ
えびとのきーにはまきーにされてはゐ車よりを
そてまいりうりかるなど夕つかたよりぬはあさし
多くはたりあとうて八人はいくはちくかりとと
ちの中将院の御ちう殿もたるおはしも御ちぢ
まいりすゐ平宰相院乃御ちう殿よりはまくおりさ
殿給ふ御堂うて御湯殿ありり御そうしてく
のちあこぶたうはちやくさうせんがう豊まてお
とどくはちんじわるはぢの殿右乃きーおかぐわ
ちはくたうをて殿うへとも御すゐ院乃御まへよね
えぢめて御髪とうもまいりはちくるひ乃
かーきはうちうきなどぢはやくきーにまうきれ
すうり陪膳権大納言さけやくそう髪上人かんち
めはは髪ぢ上人まゐ二かり女房はは中はは
多くさはくく乃風流のくぶはいくさひるどより
おりさまふかりまゐりうきこかりてもくはぐきる
ぶはまりたうりくはの人梅つかりくちいて
はいーせまりまゐ接吸髪だ乃おくこれはもり
さうもはは文乃月はくれりぢ文はは冊ますれ
乃梅のーまぢちどかりあど御ぢどはんを
ちはぢおそびはずまはは冊はうふ楽宝ども

うけ〳〵まうれだぶ〻あてさぶ物のぷよれ三て
ぶ〻ぶ〻〳〵ぶまてかりーろうゃゆぷーぷ水のそ
こあをカくかむるあやとそく海ぶむきかどあわ。
うれこでそくれ文乃ぷ三てこみ海るくけまい
ぶんぷ城られ三〻原もえんるうをくとそくるゑ。
まうぶありくるゃぷ廿二日くらんぎこの日で広を
らりものどをさてまつり海ぶぷてりん。和琴れ
馬二疋まいぶぷうりとあるぶれおくぶに御馬
さまくきまつり海ぶぷの御ぶんどもぷけりひこくよ
でやうこうれぶまへの意ぶ引いでこれだぶりんれと
け釈迦らくつぐ三人うけとぶ。愛れりぶひくく

り海ぶぶのやあるぶ乃広寺ぶのそのち美おこあくぶだの
海〻〳〵一切ー海ぶへきぶ。ぶ乃くへ方づくれさ
くすれむぶあらいでくなぶーとくそまつるぶ
屋敷寺ー海ぶまるぶ海ぶんぶうあそびめ
のーらせ海ぶくくつ海ぶまにだ大原ぶの
加ぶ〻ぶ一信ー海ぶ愛乃きいするゃ広ゆ
ぶさ海ぶぶぷくまら。寛治ーくはぶつぶ正信
ぶ。保元ぶ月乃梅愛ぶ下れ広れをでーなまひこ。
いまのぶありきまれぶれ海ぶきまめーあをあくさ
ぶぷくあでさくありー海ぶくんぎぶ乃ぶ日
ぶ女房のさくぞくいぶくぶいくきぶのくある

丁度ぞのゝくゑゝはゝとよなるびのすて大納言
殿乃ごゝしはをゝるかゝさいゝやうこ信乃もゝへも
別よつゝられゝゝ建久はゝ頃なゝとゝへう
さゝ女をあり事あかをゝおゝゝしゝいてけるゝやゝまゝく
ゆゝゝき事ゝゝをゝてゝゝゝびぬゝおゝ事ゝゆゝとの殺よ
二条あゝてゝゝこゝゝゝよゝ火ゝゝゝぐゝゝゝて内院殿の近ゝゝ
きゝゝゝゝゝまゝゝて内膳屋焼ゝく神代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とぞやうくまぶそのころ宰相乃三位の家定卿乃侍事ども
はつかのめとて人くくまのゐりはじめ給ふ七よ給へ
一。関白殿とさしてめ大臣かんらめおほあくぎもく
もの世五日ゐり文章はしらせ序さすてまつる所愛
絵乃奥められてくぐくまこのゐぶとゆあくを給ふ
そのゝち文墨めして詩乃部ゐうゑうありきぐんもの
ぎーにあめるもも保延乃さまあーとぞうけうまん
ゆーがくてらーあけぬまぶ寒治もこまよ歌
書きらくあーるの元はりを思ひあるさん
いとうどにを院うちに書きーき酒とふめてあ。橘
改元のを賀れどこあるる。法の法まへきちうを

ゆとび大文院よをあるる。まゆ冷泉ますれこうだ
あといはぐーれおの大納言さうちうれあるう。
あのじう院乃ゐーまをはあ礼ゐり人くまいう
給ふ。橘政殿兼左大臣ひだ右大臣時へ内大臣さうし
大納言ゐはきむとけ。寒雄あきはぐ道良中納言
よためつ。すーのり資季。冬忠。実教云えみちなる
宅嗣ぐいーやうよみちゆきぐもろのぐおき教教上人
きゆやう敷首とこめぐすまてはゆのとしく
ゐーあえくびきいまゐりあしゐつゆ。へくくえ
なこゐてくきだのおくびは橘改乃まるまで。
引ゐりでたくさまら給ゐりかも又そのあるでつ

なわ。よりはるぎ。きんこの。所縁おぼしめしもまことわ
ぞ。ひとあめちらまぢぱ。のぞぐ入して。廊所よりあるを。
おのが事ゆえ。くしとこのらまでさ。海くに院の法
皇ゆ。ひ。ひ。ひ

家のあるものはようかいわ法つかあり法ありさ法と安院
もいやもむこと多くかてはけかてと見てメてまつわ
法よ宮后妃ときてゆかるあれも院乃はこみかん
まて信よおりまりまりは法を市毋ものあどきてこし
さ娘法いりとこれ法門いしはけかくわて渡てまつへ
いまはたとこはて内のこれてしまておそのの
八月より宮后妃ときてこゆかるはち仙花門院
とあそしこ市事なるべ院乃りう妃十三りり
なませなまふいきんむこのあ和とい彩こ人のむすめ
乃所とこるり園満院乃法教まの法でこはかるを
さまふへとて四月廿八日にその法ようみあり

兼明門院よりまりは法院乃あしろ彩さこ乃
法車まてかんさちえい車とをさこの大納言を上を
ゆまて六人敷上人十六人馬まて多くりいとよ
そりこうかでさくこくわてこ法ぬそれ衆やか
て法こおろてはそれ園助ときまもいとこ乃
こけさ御かどのかちてあそれまんこ寺あ
院乃妃ちれ法車まはかこのうえまてこの法へ
やはけさこれまのまはいまをもこもかはてそ
いとくたこきさまざりこれはけこけ負れはこの
まう妃もどてまかせ法へかの兼明門院まては奥味
きここめかどすべかのまを法親王がひてて

てそはそのゝ法しあぶおまこれは中よものはるを
はかうちとぐれます（まこば院をいとらうゝ中も
ひやしさせたまひそわ。かくいふ程は二月一日の朱
ばのよりも方まの文のうちへまくれすてたうる
事もまつうるふ。神のはもうわは弟院ゝの二条
なてのゝいより火いぐ祝てむひるえおつる海と
よそはゝめて人門番ゝ院。おゝ海ゝもなのあ敷
ふ。物乃あゝりゝれくゝそゝあてさいきうれも
人もうはゝんるけまゝたゝきんるとの中将のはとのあ
よはゝつひきは車代陣ゝるとめて宮ゝ后文乃法
ゝへよんゝ内乃うへゝはとんてはげ友いぶ祝ゝてまつ

せ法ひて文もゝてますつ院。きんゝはゝりゝりてて
門といそゝきいそゝせ法ゝぶゝそゝわあまゝく指大納云
まゝとのまいり法ゝりまれ車よめゝうつりて春日
富小路ゝきんゝまけの大納云乃あて寿日すゝ家よ行事
あゝうゝれかゝおそ桜改殿ゝとゝじめ大きたゝぐ乃左
大臣内大臣よりまもあまゝあゝ人ゝくまのりはた
文法ゝ院もはゝくゝまゝ引いでゝ乃ゝゝてまつゝき法ゝ
あゝ家かゝゝ小弟院殿より書日はゝかゝはゝかりあ
ゝまゝゝく院のおゝゝます次ますでれおうゝ友へ行人へ
して行事あゝり。事あけゝそゝのちゝへ前の大きお
とゝ殿乃次東ゝゝ乃ゝ法へ行幸なりてゝゝゝ

内裏よりあるべき由仰せ蒙り候
しに世間のうわての事いさ
らうこころばせうりめさせ給
まで上井殿度々あわれ
しをあまたはるかいたわしかど義元は焼死のち
きこえしくあれ宇津ゆ事いなるはるかそれ
はうまやけそんして又かくうちつづきめるをいと
あさましうおぼしをかれよわもはかり法事にそ
まけかくあさせはへらをいくまいる記事と
うやとて人くあるあきさ。院をおぼしわきはか
されてあるべき事とえ記ひろるをはつひらまかめ
ましへ。院をはもはいりさはかりのちさあまで
はとの井乃人くあどりどろもまいりつひ
て猿乃雲井あまどかくいとせうなる。
きこの面いはまはるる梅はいやなり詠くさ
さるが花のはあるはしはしむ屋ちかなる那
きば雅家乃さいしやうれ中将しくいとえむお
あらひまはうすやうはかはひく院乃上
文もまをかさくまりへ梅はれ
九三月はかるあるこの方はか
やてられ梅はむをびはをさ桜ばはは毎の
内侍はうけまいりくやあるときくはわ

あんなりとといはゝ
やされまゐらせやうまこをうま
くらおしうそれ都のさうくうき
やうくちうしうさく年号ちい
よりぬきどうを火災しつまして
あのあうちむうまちかしうれ大納言雅親の故
乃そだより火いそぐまして面よちやうやまこうはむ
あくしうをいうこうし。寛元四年九六月りも
おそうきゆかりうどあのあるなるなうき
よりもおえさうまれ雅親の大納言はもだうり。
ゆうかいこれ申けさはおきはいとくうぎか

ようとそ乃ふへうとふあぐこをあるかきうも
いぐきそうゆ火秋よへまして。えつ乃時
はうりお蓮華王院乃御塔りめえはなうれだ。
あうに院もは華なうはみちすぐもさあうう
うりとうけうせうまいとめうあうあ。
物語慶も御くあるよりまいも始りり。三十三乃
の法堂れう稚乃うる一所よりのはよさくえ結
るは不動堂はくとたうえのこうに寶義法るべ
りでかうじてうきちようあ。後白河院乃
はもうわ御ふまはめうおりりならて。長寛二
年供養あまはは後ちあんごれき御てうあも

はるかぬのさきまでなびいたりをうちあり又いま
ぐさのく鐘楼そうぢうとおりやきぬぬ
風さへあれまりもくちあのほのとよまりあれと
しうの野さまでもえそわたそれ辺かつくさそれの火
もえあるくのちの又雙林寺にいたりて火ついて
うしてやがて火はあるきもしーあ
あと　風さつよあるやぬぬそれ火きてのちまた
川ぐさ近潮ゴくりよ火いぐきて。法成殿御もを
やしくくあけそうり又義明門院のちそれなどめを
火いでそれあ人くくまいりけどゆ中ぬなどよ
　条まで又火出きて十八ちやうあけぬぬ面ぐく

廿三日よりはじまりよをよまて日とへ四とを
あるあるを一日よ二三度。二むし三むしよりけて
をえあるぬるあるかどくふ乃あこいとでよ三分
三やけぬいとくめつうあやしき事なりあぐ
ぬふあるにとて。陰の御前よ陰陽師七人めて
御はらをこうるをそれはつしこと事被た
陰陽師をはじめ山くあもはいのりつしまつ
あるまきすぬとはちふおかせ弘院のうへ乃法
ありさ法のぬ法ぬよめでそくおそしまはなお
りはいのいかよれはつしこもあでき事のあむと
そはほしはちぬ弁おりさ被ひめ山はは

年とへくまのうらふねしてぶつ川いたりうに
七日ゐこりそのゆゑよるの大乗経くやう侍
せんとゝ御ゆくうのはちをぞかりかはゆきぬ
野きくゝ那智のぐをはぐまれるかゆゑ寺より
はぐれ清浦をかうもんしうけまさるべかはゆゑあり
ゑん寺引よまつやうをこゝあるれほうしにこの
くうきすべく神をこやまゆゑ仏をさゝとひさせ給
ゆゑなさ　かくもりとゝ書とゝあめりあらとそ
世のへゆゑあひけれ

国立公文書館
National Archives of Japan